

健康

県歯科医師会コラム

歯の長寿学

玉城 民雄



むし歯ほど私たちになじみ深い病気はありません。むし歯菌は、父親、母親から子どもへと感染の連鎖が続いていきます。約一歳半から三歳の間にこの感染が完成されます。

もし、この子がむし歯菌から感染を免れることができれば、一生むし歯に悩まされることはありません。これからの世代を担っていく子どもたちを、むし歯という病気から救い出す方法が、二つあります。

第一は、お子さんが離乳期に入ったら、大人の口の中のむし歯菌を乳幼児に感染させないことです。親の口に触れたスプーンをそのまま子どもの口にもっていったらだめで

予防できる病

<36>



フッ化物応用で耐菌化

す。むし歯菌の多くは、お母さんの口から感染しています。第二は、乳歯の時からフッ化物を応用することです。生え始めの乳歯や永久歯の表面のエナメル質の出来は、不完全でむし歯菌のアタックには耐えられません。歯の表面のエナメル質が、むし歯菌に対する抵抗性を獲得するには、三〜四年を要します。

エナメル質表面は、脱灰、再石灰化の繰り返しの中で成

熟をし、耐むし菌性になっていきます。このエナメル質成熟の主役は、唾液です。唾液の中の食物由来のカルシウム・リン・フッ素が数年をかけてエナメル質を強化します。しかし、生え始めの歯にフッ化物を応用するとエナメル質は、急速に耐むし菌性を有するようになります。

私たちの身の回りでは、フッ化物配合歯磨剤、フッ化物配合スプレー、フッ化物配合

フォーム、フッ化物洗口などがあります。自分の生活に合ったフッ化物応用を選択することができま

す。久米島町では、小学生、中学生、高校生のむし歯の総数が、一九八九年には一万六千四百九十九本ありました。フッ化物洗口によって二〇〇四年には、千八百八十八本に減少しました。減少率は、85%です。十二歳児の一人当たりのむし歯経験歯数(DMF

Ⅰ)は、一九八九年の十二本から二〇〇六年の〇・九本と十八年間で十分の一以下に減りました。中学生でむし歯に全くかかったことのない(カリエスフリー)生徒は、〇六年には66・5%に達しました。

子どもたちをむし歯という病気から解放するのにフッ化物の応用は、とても有効です。ブラッシング、フロッシングとフッ化物の応用は、むし歯予防の両輪です。どちらが欠けてもだめです。

(具志川歯科医院)